

あとがき

本書は Jürgen Molmann, *Theologie der Hoffnung. — Untersuchungen zur Begründung und zu den Konsequenzen einer christlichen Eschatologie*, Dritte Auflage, 1965 (Chr. Kaiser Verlag, München) の全訳である。キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究という副題が示すように、本書はキリスト教的終末論がどのように基礎づけられるか、そしてその神学的射程はいかなるものか、さらにその実践的方向と内容はいかなるものかを、幅広く底深い対話において究明したものである。新進鋭の学者、ユルゲン・モルトマン教授のこの書物が、現代ヨーロッパにおいてベスト・セラーになっているということは、十分うなずけることであるし、また大いに希望を与えられることである。「うなずける」というのは、この書物が提供するキリスト教的終末論の理解が、現代における神学の基本構造に対して鋭い批判を投げかけ、神学が真に神学的であるとはどういうことかを再吟味させるのみならず、種々の神学が深くかわる諸時代・諸人物の哲学や世界像や歴史理解との対話をうながし、さらには近代から現代に至る産業社会の構造・本質を追求することにより、約束された終末を待望しつつ未来投企的・創造的に生きるべき教会のあるべき姿を浮き彫りにするからである。希望を与えられるというのは、この書物が、わが国においても混迷を続けている宣教の内実について、明確な指標を与えてくれるのみならず、教会が物化と人間疎外的大海における意味と慰めの孤島になり果ててはなら

ず、新天地を待望しつつ変革と創造の母体なるべきことを訴えるからである。新約的使信の内容は、十字架につけられたイエス・キリストの復活においてただ一度宣言された神の義の自己遂行と約束である。万物がそこに閉じこめられている死・虚無・頹落が、最後の究極的なものではないはず、真の生命・真の義・真の神の支配の到来が確証されたこと、それゆえ教会は決して過去を絶対化してはならず、常に新しいものを求め続け、世界の苦悩や不条理を共に負いつつ、約束された未来に向かって絶えず出発し続けるべきであること——このことが、希望の内実であり力である。そのような希望の根拠と射程を豊かに解明するものとして、この書物が現代の神学および教会に貢献するところ大であると思わされるのである。

しかし、この書物はかなり難解である。通読するのに相当な努力が要求されるし、精読することはさらに多くの集中を要求する。その上多方面にわたる基礎的知識が前提されている。そのような覚悟をもって著者と対話を試みるならば、この書物は、いかなる解説や補充なしにも、自ら豊かなものを読者に与えるであろうことは確かであるが、同時にこの書物の背景をなしていると思われる神学的・哲学的状況について、若干の解明を試みることは、この書物のより正しい理解のためにいくぶんか資することになるかもしれない。

近代のプロテスタント神学は、近代が生み出した思想や世界像と密接に関連し合っている。近代は、デカルトが認識の領域を自然のそれと精神のそれとに分けて以来、現実の認識において分裂した道程を辿ってきた。この分岐は、カントにおける純粹理性と実践理性の区別によっていよいよ決定的となり、伝統的な神証明の道はもはや適合性をもたないものになってしまった。自然の領域は物理・数学的に算定可能な因果律が支配する「物」の世界であり、自然科学の進歩と自己拡大によってますます決定論的・完結的になる。他方精神の領域は、価値・意味・自由が問われる領域であり主観性の領域である。「物化」される自然の領域はいよいよ確かに広くなり、「主観性」に還元される精神の領域はいよいよ不確かになりせねばめられる。世界は因果的・完結的なものであるかぎり「神」が入る余地はない。「神」は精神の領域においてのみ要請されたりされなかつたりする任意の

存在となる。しかも精神の領域が、自然の領域の拡大と深化によっていよいよ狭められるにつれて、神も衰微する。かくて近代は必然的に神が衰退し遂に死に至る過程である。

そのようにしてもはや古い形而上学的な世界からの神証明は無効となる。神は主観性の領域においてのみ生きられるものであるがゆえに、神学もつましくこの領域に自己を限定すべきである。《物化》は歴史の上にも力を及ぼし、因果と類比のみが現実を確定する規範となる。すると一切の奇蹟は疑われ、遂には消え去る。かくてキリスト教の本質は、《絶対依属の感情》や《魂の無限の価値》や《価値判断》になる。そして道は心理化・倫理化・内面化の方向を辿る。あるいはせいぜい理論的無神論と内面的敬虔性の逆説的同時性が《単独者》の《瞬間》において語られることになる。

このような《物化》と《主観性》の分裂の道は、ヘーゲルの《精神》による統一の試みの後にも克服されず、むしろいよいよ深まってゆく。一方において理論的無神論はさらに自己を広げ、他方において《ドイツ・イデアリスムス》の《自我》はさらに高く深く主観性の太空にのみ飛翔する。

結果は何であるか。神は、もしなお神について語ることが可能であるなら、ただ《自己》について語ることの中にのみ現われる。自己の中から語る以外に神について語る道はない。これこそ近代が遂にヴィルヘルム・ヘルマンにおいて見出した結論であった。二十世紀の神学の主導音は、このヘルマンの《自己》から生まれてきた。ブルトマンは、この《自己》を人間の自我に還元して徹底的に実存化する。同時に自己について語ることなしに神について語るとは、客観化する悪しき思惟である。ここにおいては三位一体論は消え、キリスト論は可變的となり、創造論も終末論も実存化される。一切は人間の《本来的自己理解》に集中する。非本来的とは、自己が語りかけられている存在であることを忘れ、過去と自己を絶対化しつつ、誤れる安心感において自己を将来に対して閉じる態度である。それは保証なき開放性、決断の自由を知らぬ誤れる自己理解である。

バルトは、あの《自己》を神の自己にかけて徹底的に神中心に理解する。《自己》は一切の基礎づけなしに直

接的に基礎づけられている。神の《自己》はただ神の《自己》によって知られる。神は神によってのみ知られる。神は神によってのみ証明される。啓示とは神の自己認識である。かくて、ここにおいては三位一体論（しかも内在的のそれ）が中心になり、神の言葉が規範的となる。

しかし、両者は共に超越論的主観性の神学であるといえよう。それらは共に聖書が証言する《約束》というカテゴリーから出発するものではない。歴史を通して自己を確証する神の義・生命・支配の自己遂行という線に沿って展開された思惟ではない。そのかぎりでは、全体としての歴史からの神の間接的自己啓示というパネンベルクやレントルフの道も正しいとはいえない。確かにそれは、実存からの神証明に対して有意義なる補充ではあるが、自ら与え給うた約束と契約を、遂にただ一度イエス・キリストを死人の中から甦えらせることによって確証し、身体の贖い、万物の更新、新天地の到来を約束し給う神の真実に即して展開されたものではない。普遍的な神の義・生命・支配の到来という約束を聞く福音が宣べ伝えられるところにおいては、認識や行動の自己完結性や分裂が疑われ突き破られる。死人の中からのイエスの甦えりにおいて、イエス・キリストの未来を確証された者は、自然・歴史・自己にかかわる一切の認識を途上にあるものとして知り、いかなる者にも増して批判的となりかつ創造的とならなければならない。そのような者は、《被造物の嘆き》や《歴史の危機》を真に知り、万物の開放性、未決の過程を意識する。実に、実存の自由と未来開放性を語り、同時に世界の完結性を語ることは、あの分裂した認識論の固定化・絶対化に由来する自己矛盾にすぎない。万物の未来を待望する者のみが《希望》をもつ。そして、《希望》に生きる者のみが《変革》をもたらす。その変革は具体的に社会にも向けられなければならない。物化の過程を辿り、疎外を惹起しつつ固定化する近代産業社会は、絶対化されてはならない。《教会》は、その社会がふりあてて役割を甘受し、個人の祭儀、制度の祭儀、《意味と慰めの孤島》として主観性のゲッターになり果ててはならない。世界は未だ神の義・生命・支配の完全なる未来に達しているのではない。約束された終末が成就していないのであるかぎり絶対化や固定化は許されない。教会は絶えず世界の

モンタノス	Montanos	423	リッチュル	Ritschl, A.	34f.
			ルカーチ	Lukács, G.	280
ヤ	行		ルソー	Rousseau, J.-J.	271
ヤスパース	Jaspers, K.	48, 64	ルター	Luther, M.	31, 65, 98, 237f., 340, 358, 394
ユスティニアヌス	Justinianus	360	レッシング	Lessing, G.E.	306, 420
			レントルフ	Rendtorff, R.	80, 83, 126f.
ラ	行		ローゼンシュトック	Huëssy	79
ラームス	Ramus, P.	275	ローテ	Rothe, R.	78f., 259
ラメトリ	de Lamettrie, J.O.	76	ロートアッカー	Rothacker, E.	281
ランケ	von Ranke, L.	16, 50, 199, 267, 280, 285, 287, 311			
リッター	Ritter, J.	48			

中で不安な心であり続け、神の義・生命・支配を指さしつつ「希望」の光をかがげつつ終末論的に生きなければならぬ。かくて教会は認識と行動における変革と深化の希望に満ちた酵素とならなければならないのである。

この書物がふれる諸領域は多様で広い。それだけに多くの対話の可能性を含んでいる。その対話の幅の広さ、内容の豊かさは、本書第三版の付録として公開されている、著名なマルクス主義者エルンスト・ブロッホとの対話によっても示されている。古いキリスト教文明が力を失い、伝統的教会がその向かうべき方向を問われている時、さらにまた「世俗化」の真義が吟味されている時、そして全人類が真の「希望」をいよいよ希求している時、この書物が提供する多くの問いと示唆は、ますます深く不条理な力が強大になりつつあるこの国において神学を志し、宣教にあずかるわれわれにとって、喜ばしくも重い課題への責任と勇気を再認識させてくれるであろう。

この書物の原文は莊重かつ流麗なドイツ語であり、しかも広く深い諸領域の知識に富んだものである。これを、原文の響きを可能な限り残しつつ、しかも読みやすい日本語にすることは、浅学非力の私には至難のことである。結果としては、できるかぎり原文に忠実にという方向をとり、そのため決して読みやすい文とは言えないものになってしまった。James W. Leitch による英訳「Theology of Hope (SCM)」は、後になって入手したが、かなりの意訳であり、難解な箇所際に多くの示唆を与えられた。今回もまた東京神学大学の佐藤敏夫先生に細部に至るまでも原稿を読んでいただき、多くの御教示をいただいたが、先生のお骨折なくしては多くの点が不明であったであらうことを思い、ここに心から感謝の意を表したいと思う。また、絶えず豊かな励ましの言葉を下さった日本基督教団名古屋御器所教会士岐林三牧師をはじめ愛岐地区神学研究會の方々の御厚情を憶えて、深い謝意を表する。

一九六八年三月 尾張一宮にて

訳者